

【報道関係各位】

2014年2月

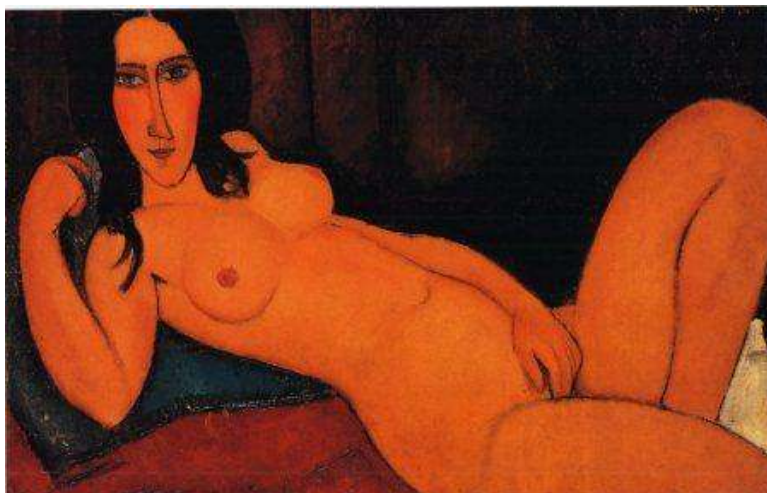
〈ポーラ美術館 展覧会案内〉

生誕130年

モディリアーニを探して

アヴァンギャルドから古典主義へ

FINDING MODIGLIANI : From Parisian Avant-grade to Classicism



アメデオ・モディリアーニ 《髪をほどいた横たわる裸婦》
1917年 大阪新美術館建設準備室蔵



アメデオ・モディリアーニ 《ルニア・チェホフスカの肖像》
1917年 ポーラ美術館蔵

2014年4月12日(土)－9月15日(月・祝)

【報道に関するお問い合わせは】 ポーラ美術館 広報事務局 担当: 増田、後藤、三井 Tel 03-3575-9823 / Fax 03-3574-0316
ポーラ美術館 広報担当: 中西 Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108

開催趣旨

伝説的画家の枠を越え、モディリアーニのリアルな姿を明らかに！

20世紀初頭に、芸術の最先進地パリをめざして世界中から集まった若い芸術家たち、いわゆる「エコール・ド・パリ」を代表するイタリア出身の画家・彫刻家、アメデオ・モディリアーニ(1884-1920)。確たる評価を手にする事のないまま、退廃的な生活のうちに短い生涯を閉じたことで、その存在は長く伝説的に語られてきました。本展は、伝説に隠れがちなモディリアーニの足跡を同時代の中に追うことで、その芸術家としての歴史的な位置を再考する試みです。

モディリアーニがパリに来たのは1906年、21歳のことです。その時期のパリは、セザンヌに代表されるポスト印象派をはじめ、フォーヴィスムやキュビズムなどの前衛芸術や、アフリカやオセアニアのプリミティヴ・アートに目を向けるプリミティヴィスムなど、多様な芸術的動向が花を開かせていました。そうした刺激を受けながら、モディリアーニは自らの理想とする芸術への道を歩み始めます。その後、激動期のパリを駆け抜けた10年余り、芸術家としてのモディリアーニの姿は、時代のいかなる場所に見出せるでしょうか。

本展では、モディリアーニによる油彩画、彫刻、素描あわせて19点を軸に、ピカソやブランクーシをはじめ、20世紀初頭の芸術を牽引した主要作家の作品とともに、65点を展覧。同時代の状況に照らしながらその芸術の展開をたどることで、伝説の奥にみえてくる、リアルなモディリアーニ像へと迫ります。

開催概要

【展覧会名】 モディリアーニを探して —アヴァンギャルドから古典主義へ

【会 期】 2014年4月12日(土) — 9月15日(月・祝) (会期中無休)

【開館時間】 9:00~17:00 (最終入館は16:30)

【会 場】 ポーラ美術館 展示室1 (神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)

Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108 / HP: <http://www.polamuseum.or.jp>

【出品点数】 65点 (うち、モディリアーニ作品については、油彩10点、彫刻1点、素描8点の計19点)

【展覧会構成】 第1章 1906 - 1909 パリ・モンマルトル、デルタ通り

第2章 1909 - 1914 パリ・モンパルナス、シテ・ファルギエール

第3章 1915 - 1918 パリ・モンパルナス、カフェ・ラ・ロトンド

第4章 1918 - 1920 ニース~パリ・モンパルナス、グランド・ショミエール通り

【出品作家】 アメデオ・モディリアーニ、ポール・セザンヌ、ピエール・オーギュスト・ルノワール、アンリ・ルソー

ポール・ゴーガン、アリスティド・マイヨール、アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック、ピエール・ボナール

コンスタンティン・ブランクーシ、モーリス・ド・ヴラマンク、キース・ヴァン・ドンゲン、アンドレ・ドラク

パブロ・ピカソ、モーリス・ユトリロ、ジュール・パスキン、レオナルド・フジタ(藤田嗣治)、マルク・シャガール

マリー・ローランサン、ジョルジョ・デ・キリコ、ジャック・リプシッツ、シャイム・スーティン、キスリング

【入館料】

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

本展のみどころ

1. ポーラ美術館が収蔵するモディリアーニ・コレクション3点は、日本の美術館では最多！ 貴重なモディリアーニ作品19点がポーラ美術館に集結！

35歳の若さでこの世を去ったモディリアーニが、本格的に作家として活動した期間はわずか10年余り。ポーラ美術館では、美術館としては日本最多の3点の油彩画を収蔵。本展では、日本で収蔵されているモディリアーニの油彩画、素描、彫刻19点を展覧し、モディリアーニの画業に迫ります。



アメデオ・モディリアーニ
《婦人像(C. D. 夫人)》
1916年頃 ポーラ美術館蔵

2. 流れるような造形の肖像で知られる油彩画、生前より評価の高い素描、 イタリア時代より親しんでいた彫刻…3つのジャンルから、モディリアーニ芸術を再考

モディリアーニの作品といえば、引き伸ばされたような長い首、アーモンド形の目の肖像画がよく知られています。このような肖像画以外にも、彫刻や素描も制作していました。イタリア出身のモディリアーニは、ミケランジェロの作品をはじめとした石彫の伝統に親しんでおり、若き日より彫刻制作に対する強い憧れをもっていました。また、折にふれて取り組んでいた素描が生前、高く評価されていたことは、あまり知られていません。本展では、初期から晩年にわたる10点の油彩作品に加え、1点の彫刻、そして8点の素描により、芸術家としてのモディリアーニ像を多面的に浮かび上がらせます。



アメデオ・モディリアーニ
《頭部》1911-1912年頃
彫刻の森美術館(公益財団法人
彫刻の森芸術文化財団)蔵

3. セザンヌ、ピカソ、ブランクーシ…同時代の前衛芸術の潮流から リアルなモディリアーニ像に迫る！

1910年代以降のエコール・ド・パリの文脈で論じられることの多いモディリアーニですが、生まれ育ったイタリアからパリへ移り住んだのは1906年と早く、20世紀初頭の多様な前衛的な動向にほぼ遅れることなく接していることは見逃せない事実です。本展では、モディリアーニ作品とあわせ、セザンヌやピカソ、ユトリロ、ブランクーシら、モディリアーニを刺激した作家の作品を展覧。同時代の芸術的状況に即してモディリアーニとその芸術の位置を探ります。



ポール・セザンヌ
《アルルカン》
1888-1890年 ポーラ美術館蔵

アメデオ・モディリアーニについて

イタリアのトスカーナ州の港町リヴォルノで、ユダヤ人の一家に四人兄弟の末子として生まれる。幼少時より病弱であったが、少年期より芸術に興味を持ち始め、14歳の時にリヴォルノで絵画を学び始める。その後、フィレンツェとヴェネツィアの美術学校を経て、21歳のときにパリに出る。当初はモンマルトルを拠点に絵画制作に取り組んでいたが、彫刻家ブランクーシとの出会いを機に、1909年頃から石彫の制作に打ち込む。しかし身体的および経済的な負担に耐えられず、1914年頃に彫刻家への道を断念。その後は画家として、アーモンド形の目と長い首を特徴とする、独自のスタイルの肖像画を描き続けた。ピカソやフジタ、キスリングをはじめとする画家や文学者と親しく交友。端正な容貌に加え、貴族的な気品と高い教養により、多くの人々を魅了した。その芸術は一部から高い評価を受けながらも、身体的な不安と生活苦により退廃的な日々を重ね、1920年に35歳で結核の悪化により歿した。その悲劇的な生涯から、「呪われた画家」として歿後も長く伝説的な存在となった。



展覧会構成

1 第1章 1906 - 1909 パリ・モンマルトル、デルタ通り

1906年にパリに来たモディリアーニは、北部のモンマルトルに居を定め、ユトリロやピカソと交流するようになります。また、セザンヌやゴーガンらポスト印象派の絵画に強い感銘を受けたのも、この頃です。

画家としてのモディリアーニを初めて評価したのが、医師でコレクターでもあったポール・アレクサンドルでした。1907年秋にアレクサンドルと知り合ったモディリアーニは、モンマルトル界隈のデルタ通りにある、このコレクターが主宰する芸術家コロニーに身を置くようになります。アレクサンドルの庇護のもと、モディリアーニはパリで自らの芸術を創り上げる道へと踏み出していきます。



アメデオ・モディリアーニ
《ポール・アレクサンドル博士の肖像》
1909年 ヤマザキマザック美術館蔵



アメデオ・モディリアーニ
《青いブラウスの婦人像》
1910年頃
公益財団法人ひろしま美術館蔵



パブロ・ピカソ
《海辺の母子像》
1902年 ポーラ美術館蔵
© 2014-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)



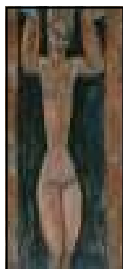
2 第2章 1909 - 1914 パリ・モンパルナス、シテ・ファルギエール

モディリアーニは1908年ごろ、アレクサンドルの紹介により、ルーマニア出身の彫刻家ブランクーシと出会います。彫刻、特に石彫に情熱を傾けるようになったモディリアーニは、翌年にはブランクーシが制作するモンパルナスのシテ・ファルギエールに移り、彫刻の制作に取り組み始めます。

この時期、アフリカやオセアニアなどの地域の仮面や彫像がパリにもたらされ、原始の美を見出すプリミティヴィズムの気運が高まっていました。ピカソらによるキュビズムと同じく、モディリアーニもその影響から無縁ではなく、カリアティード(人柱像)をモチーフに、自らの理想のフォルムを追究していきました。しかし、彫刻制作は費用と体力の面で大きな負担となり、1914年頃には断念することになります。



アメデオ・モディリアーニ
《頭部》1911-1912年頃
彫刻の森美術館(公益財団法人彫刻の森芸術文化財団)蔵



アメデオ・モディリアーニ
《カリアティード》
1911-1913年
愛知県美術館蔵



コンスタンティン・ブランクーシ
《接吻》1908年
彫刻の森美術館(公益財団法人彫刻の森芸術文化財団)蔵



パブロ・ピカソ
《裸婦》1909年
ポーラ美術館蔵
© 2014-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)



レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《キュビズム風静物》
1914年 ポーラ美術館蔵
© Fondation Fujita/ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014 F0002

3 第3章 1915 - 1918 パリ・モンパルナス、カフェ・ラ・ロトンド



ふたたびキャンバスに向かい始めたモディリアーニは、彫刻で追究していた単純化されたフォルムを引き続き肖像画で探っていく、描線やマティエールが次第に洗練されていきます。1916-1917年の裸婦のシリーズは、この時期の意欲的な絵画への取り組みの表われといえます。

モディリアーニの絵画は、ポール・ギヨームやレオポルト・ズボロフスキらの若い画商の目を惹き始めます。ピカソやキスリング、デ・キリコらとともにグループ展に名を連ね、同時代の前衛のひとりと目されるようになるのも、この時期のことです。しかしその生活は安定せず、モンパルナスのカフェを主たる場に、モディリアーニは退廃的な日々を重ねていくことになります。



キスリング
《ファルコネッティ嬢》
1927年 ポーラ美術館蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014 F0002



パブロ・ピカソ
《葡萄の帽子の女》
1913年 ポーラ美術館蔵
© 2014-Succession Pablo Picasso- SPDA(JAPAN)



ジョルジョ・デ・キリコ
《ヘクトールとアンドロマケ》
1930年頃 ポーラ美術館蔵
© SIAE, Roma & JASPAR, Tokyo, 2014 F0002



左: アメデオ・モディリアーニ
《ルニア・チェホフスカの肖像》
1917年 ポーラ美術館蔵
右: アメデオ・モディリアーニ
《婦人像(C. D. 夫人)》
1916年頃 ポーラ美術館蔵



4 第4章 1918 - 1920 ニース〜パリ・モンパルナス、グランド・ショミエール通り

1918年、第一次世界大戦の戦火とスペイン風邪の脅威を避け、モディリアーニはズボロフスキに導かれてニースに赴きます。南フランスで出会う農夫らをモデルに描いた作品には、それまでにない素朴さや穏やかさがうかがえます。この頃からモディリアーニの肖像画は、優美な描線と透明感のある明るい色彩との調和を通じて、独特の精神性を帯びるようになっていきます。

静穏で古典的なものへの憧憬はこの時期、秩序への回帰の気運として、ピカソをはじめ前衛の芸術家に広く共有された姿勢でもありました。しかしモディリアーニにおいては、少年期にその心を強くとらえたシエナ派など13-14世紀のイタリア美術の記憶に促されたものでもあったといえるでしょう。



アメデオ・モディリアーニ
《女性の肖像》 1918年
個人蔵



アメデオ・モディリアーニ
《若い農夫》 1918年頃
石橋財団ブリチストン美術館蔵



パブロ・ピカソ
《母子像》 1921年
ポーラ美術館蔵
© 2014-Succession Pablo Picasso- SPDA (JAPAN)

モディリアーニの足跡と交流関係ーモンマルトルとモンパルナス

モディリアーニが制作した場所と、影響を受けた芸術家、モデルとなった人々、画商などを出品作により図解。

パリ・モンマルトルとその周辺

モンマルトルは、1850年代に始まるパリ大改造でパリに組み込まれた、もとは閑散とした地域だったが、1860年代にマネや後の印象派の画家たちが「ゲルボウ」や「ヌーヴェル・アテーヌ」といったカフェを交流の場とするようになる。1881年には、キャバレー「シャ・ノワール(黒猫)」が開店。詩人のヴェルレーヌや音楽家のサティが入り出すなど、1900年代初頭にかけて、この地域はあらゆる領域の芸術家が自由を謳歌する場所となった。その象徴といえる集合アトリエ「バトー=ラヴォワール(洗濯船)」は、1889年に完成している。

パリの前衛芸術による洗礼 @バトー=ラヴォワール(洗濯船)

モディリアーニは、集合住宅兼アトリエ「バトー=ラヴォワール」に、パリに来た1906年に初めて訪れ、ピカソやヴァン・ドンゲン、詩人のマックス・ジャコブらと出会う。1907年には、ピカソのアトリエで《アヴィニョンの娘たち》をみる。

パブロ・ピカソ



パブロ・ピカソ 《海辺の母子像》
1902年 ポーラ美術館蔵
© 2014-Succession Pablo Picasso-
SPDA(JAPAN)

キース・ヴァン・ドンゲン



キース・ヴァン・ドンゲン
《灰色の服の女》
1911年 ポーラ美術館蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014 F0003

アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック



アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック
《ムーランド・ドラ・ガレットにて》 1891年
ポーラ美術館蔵

対面は叶わなかったが、世紀末パリの気分を鋭く描き出した線描に共鳴。

モンマルトルに集う前衛芸術家との交流 @酒場「オ・ラパン・アジル」

1906年にこの酒場で、最も親しい友人のひとりとなるユトリロと出会った。

モーリス・ユトリロ



モーリス・ユトリロ 《ラパン・アジル》
1911年 ポーラ美術館蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014
F0002
© Jean FABRIS 2014



強く感銘を受けた先達の画家たち

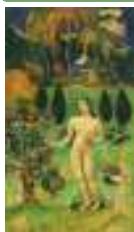
セザンヌ、ゴーガン、マティスの展覧会を見て歩いた。1906年には、サロン・ドートンヌで行われたゴーガンの大回顧展を、その翌年には、セザンヌの大回顧展を訪れている。

ポール・セザンヌ



左: ポール・セザンヌ
《アルカン》
1888-1890年 ポーラ美術館蔵

ポール・ゴーガン



右: ポール・ゴーガン
《異国のエヴァ》
1890/1894年 ポーラ美術館蔵

最初のパトロンとの出会い

ポール・アレクサンドル



医師で美術愛好家のポール・アレクサンドルは、モディリアーニにとって最初のパトロンであり、パリの最新の芸術状況を教えてくれる友人であった。1907年11月に出会い、デルタ通り7番地の邸宅で交流する。

アマデオ・モディリアーニ
《ポール・アレクサンドル博士の肖像》 1909年
ヤマザキマザック美術館蔵

パリ・モンパルナスとその周辺

モンパルナスは、フランス革命の頃にはすでに歓楽街であったというが、19世紀までは総じて発展途上の地域であった。1900年代初頭に、カフェ「ラ・クロズリー・デ・リラ」が象徴主義文学の拠点となったのにあわせ、多様な芸術家が入り出すようになる。1910年代に入ると、再開発や地価上昇の生じたモンマルトルを離れ、この地域に移る芸術家が続出した。集合アトリエ「ラ・リュッシュ(蜂の巣)」に加え、同時期に規模を拡大したカフェの「ル・ドーム」や「ラ・ロンド」は、彼らの主たる交流の場となり、1920年代にかけての「エコール・ド・パリ」の舞台となった。

異邦出身の若き芸術家たちとの交友 @シテ・ファルギエール

1908年にアレクサンドルの紹介で出会ったブランクーシの住むシテ・ファルギエールにアトリエを構え、教を請いながら彫刻の制作に没頭する。彫刻家ジャック・リブシツとは1912年に会う。1913年末には、スーティンとフジタもモディリアーニと隣り合う部屋に住んでいたようである。

コンスタンティン・ブランクーシ



ジャック・リブシツ



シャイム・スーティン



レオナルド・フジタ(藤田嗣治)



左:コンスタンティン・ブランクーシ
《接吻》1908年
彫刻の森美術館(公益財団法人
彫刻の森芸術文化財団)蔵
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2014 F0003

中右:シャイム・スーティン
《青い服を着た子供の肖像》
1928年
ポーラ美術館蔵

中左:ジャック・リブシツ
《出会い》1913年頃
彫刻の森美術館(公益財団法人
彫刻の森芸術文化財団)蔵
© The Estate of Jacques Lipchitz, courtesy
Marlborough Gallery, New York

右:レオナルド・フジタ(藤田嗣治)
《自画像》1929年
ポーラ美術館蔵
© Fondation Foujita/ADAGP, Paris &
JASPAR, Tokyo, 2014 F0002



晩年を支えた理解者たちとの日々 @ジョゼフ・バラ通り

1916年にキスリングを介して、ポーランドの画商レオポルト・ズボロフスキと出会い、正式に契約を結ぶ。ズボロフスキは晩年に向け、精神的にもモディリアーニを支えた。

ズボロフスキの妻ハンカ・ズボロフスカや、友人で同じアパルトマンに住んでいたルニア・チェホフスカをモデルに制作している。特にルニア・チェホフスカは彼のお気に入りのモデルであった。

キスリングとその妻ルネ



アメデオ・モディリアーニ
《ルネ》
1917年 ポーラ美術館蔵

ハンカ・ズボロフスカ



アメデオ・モディリアーニ
《ハンカ・ズボロフスカの肖像》
1917年 個人蔵

ルニア・チェホフスカ



アメデオ・モディリアーニ
《ルニア・チェホフスカの肖像》
1917年 ポーラ美術館蔵

見どころ作品の解説

アメデオ・モディリアーニ《青いブラウスの婦人像》1910年頃



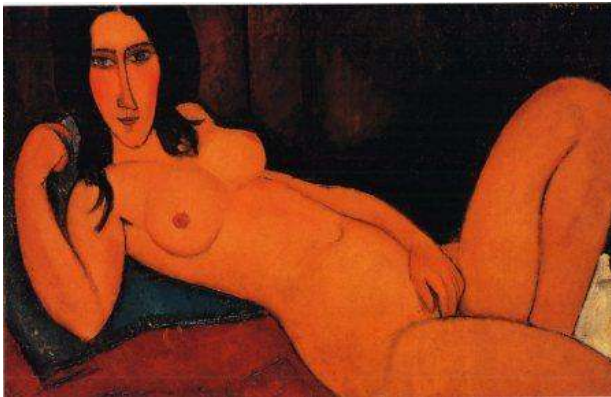
油彩/カンヴァス 80.7×54.2 cm 公益財団法人ひろしま美術館蔵

世紀末パリの女性像を描いた初期の代表作

モディリアーニがパリに移り住んで4年ほど後に制作した作品です。モデルは不明ですが、腰から上の部分を描かれた女性の身体はやや斜めに向けられており、伝統的な肖像画のスタイルをうかがわせません。

目を伏せてうつむき気味の女性の顔からは、沈鬱な様子が伝わってきます。そして、この作品にさらにメランコリックな気分をもたらしているのは、女性の着るブラウスに由来する青の色彩です。画面全体を青で描き出すことで瞑想的な効果が生み出されていますが、この手法をモディリアーニは、ピカソの「青の時代」の作品のうち目にしていたのでしょう。主題的には、退廃の色彩を帯びた女性像を描いたトゥールーズ=ロートレックにも通じるこの作品は、モディリアーニの出会ったパリにまだ世紀末の気分が残っていたことを物語っています。

アメデオ・モディリアーニ《髪をほどいた横たわる裸婦》1917年



油彩/カンヴァス 60.0×92.2 cm 大阪新美術館建設準備室蔵

彫刻から絵画への展開の成果を示す野心作

1914年頃に彫刻制作を断念したモディリアーニは、しばらく石から直接に切り出したような荒々しい人物像を絵画に描いています。絵画的な二次元性に対する意識の深化を示すのが、本作品を含む、横たわる裸婦を主題とする作品です。肖像画では直線的であった輪郭線が、ここでは全身にわたって優美な曲線を描いています。頭部と脚のところでイメージが中断されていることにより、線描はいつそう生き活きとした効果をあげています。

また、裸婦の身体と敷布、背景の壁と、画面は複数の面へと分割されていますが、それぞれが色面として作用し、豊かな色彩の効果が生まれています。

裸婦を描いた一連の作品は、1917年にパリのベルト・ヴェイユ画廊で開かれたモディリアーニの生前唯一の個展に出品されますが、その表現があまりに扇情的であったとされた当局により、開催初日に撤収を命令されるという騒動を巻き起こしました。

アメデオ・モディリアーニ《ルニア・チェホフスカの肖像》1917年



油彩/カンヴァス 72.8×45.0 cm ポーラ美術館蔵

もっとも親しく、厚い信頼を寄せていた女友達の肖像

モディリアーニのよき理解者であった画商ズボロフスキ夫妻の友人、ルニア・チェホフスカ(1895-1970年以降)を描いた作品です。ルニアは1916年頃にパリでモディリアーニと出会い、ほどなくモデルとしてポーズをとるようになります。ふたりは強い信頼と敬意を寄せ合っていたようで、ルニアはモディリアーニのパートナーであったジャンヌ・エビュテルヌに次いで多くの作品に姿を現わしています。

ルニアの目は青く塗られ、瞳は描かれていません。それによって、頭部から首にかけての美しい曲線、そして白のブラウスを着た上半身の単純化された形態がいつそう際立って見えます。人物像が周囲から浮かび上がるような表現には彫刻への意識がうかがえますが、全体にわたり曲線が作り出されているところは、1918-1919年の肖像画を特徴づける穏やかで優美な表現を予告しています。

アメデオ・モディリアーニ略年譜

- 1884年 ● 7月12日、イタリア、トスカーナ州の港町リヴォルノのユダヤ人家系の家に生まれる。モディリアーニ家は元来裕福な家柄であったが、この年、事業が失敗し破産。
- 1899年 15歳 ● 学校をやめてマッキヤイオーリ(点描派)の流れを汲んだ画家、グリエルモ・ミケーリのアトリエで本格的に絵画を学ぶ。この頃フィレンツェに旅行し、ウフィッツィ美術館やピッティ宮殿を訪れる。肋膜炎が悪化。
- 1902年 18歳 ● フィレンツェで人体習作の学校「スクオーラ・リベラ・ディ・ヌード」に入学。彫刻家になることを決意し、大理石の産地で有名なカララ近くのピエトラサンタで制作する。



第I章 1906-1909 パリ・モンマルトル、デルタ通り

- 1906年 22歳 ● パリに到着。画塾アカデミー・コラロッシに学び、モンマルトルに暮らし始める。パブロ・ピカソ、ギヨーム・アボリネール、アンドレ・ドラランら著名な画家や文学者たちと出会う。
- 1907年 23歳 ● 11月にポール・アレクサンドルと出会い親交を結ぶ。アレクサンドルは医師で美術愛好家であり、モディリアーニの作品を購入し、アトリエも提供した。サロン・ドートンヌに作品を出品。この年のサロン・ドートンヌでは、ポール・セザンヌの大回顧展が開かれ、大いに感銘を受ける。また原始美術に興味を抱き、トゥールーズ=ロートレック、ポール・ゴーガンの作品にも魅力を感じる。この頃「バト=ラヴォワール(洗濯船)」でピカソの新作《アヴィニョンの娘たち》を見て衝撃を受ける。
- 1908年 24歳 ● アレクサンドルの紹介で彫刻家コンスタンティン・ブランクーシに出会う。

第II章 1909-1914 パリ・モンパルナス、シテ・ファルギエール

- 1909年 25歳 ● モンマルトルを離れ、モンパルナスに居住する。「ラ・リュージュ(蜂の巣)」と呼ばれた集合アトリエ兼住居で生活する。4月、モンパルナスのシテ・ファルギエールに居を構え、絵画と彫刻の両方を手がける。ブランクーシから石彫について助言をうける。
- 1910年 26歳 ● ベルネーム=ジュヌ画廊で開かれたセザンヌとマティスの個展を訪れる。サロン・デ・ザンデパンダンに6点を出品。このうち4点が売りに出されたが、作品を購入したのはアレクサンドルだけであった。
- 1911年 27歳 ● コロネル・コンブ通りに住むポルトガル人彫刻家スーザ・カルドーソのアトリエで、彫刻を中心とする展示を行う。健康状態の悪化から、叔母の勧めでノルマンディー地方へ旅行する。
- 1912年 28歳 ● リトアニア出身のジャック・リブシツ、アメリカ生まれのジェイコブ・エプスタインといった彫刻家たちと出会い、親交を深める。シテ・ファルギエールのアトリエに戻り、素描と彫刻に多くの時間を費やす。サロン・ドートンヌに頭部像など7点の彫刻を出品。
- 1914年 30歳 ● 彫刻の制作をやめ、絵画制作に戻る。詩人のマックス・ジャコブの紹介により、画商ポール・ギヨームに出会う。ジャーナリスト・作家のイギリス人女性ベアトリス・ヘイスティングスと出会う。

第III章 1915-1918 パリ・モンパルナス、カフェ・ラ・ロトンド

- 1915年 31歳 ● ポール・ギヨームが数点の作品を購入。ヘイスティングスのほか、友人などの肖像を多く描く。
- 1916年 32歳 ● ポーランドの画商、レオポルト・ズボロフスキと正式な契約を結ぶ。この頃からその妻ハンカと、友人のルニア・チェホフスカが作品に登場するようになる。チェホフスカは彼のお気に入りのモデルであった。この年服飾デザイナーのポール・ボワレが組織した現代作家の展覧会「サロン・ダンタン」や、若手作家の作品を紹介する目的の「堅琴とバレット」展など幾つかの展覧会に出品する。ヘイスティングスと別れた後、ジャンヌ・エビュテルヌと知り合う。12月に、ズボロフスキ夫妻とルニアはジョゼフ・バラ通りに移る。
- 1917年 33歳 ● ジャンヌとともにグランド・ショミエール通りの古いアパートマンに転居し、制作の拠点とするが、一方でズボロフスキやキスリングのアトリエでも制作を行う。12月3日、モディリアーニの生涯唯一の個展が、テブー通りのベルト・ヴェユユ画廊で開かれる。出品作のうち裸婦を描いた絵画がガラスケースに展示されたが、警察の目に触れ、公序良俗に反するとして撤去された。

第IV章 1918-1920 ニース～パリ・モンパルナス、グランド・ショミエール通り

- 1918年 34歳 ● ズボロフスキの勧めで転地療養と疎開のため、妊娠中のジャンヌとその母親とともに南仏ニースへ。スーティン、レオナルド・フジタ(藤田嗣治)夫妻もこれに同行する。11月に長女・ジャンヌが誕生。南仏の強い陽光をあび、作品の色彩は明るさを増す。画家オステルランドに同行して、カーニュにピエール・オーギュスト・ルノワールを訪ねる。
- 1919年 35歳 ● ロンドンのマンサール画廊で、「フランスの美術1914-1919」と題した展覧会が開かれ、モディリアーニはピカソ、マティス、ドララン、ヴラマンク、ユトリロ、スーティン、キスリングらとともに9点の油彩を出品。展覧会は成功をおさめる。
- 1920年 ● 結核性脳膜炎のため死去。享年35歳。その2日後の早朝5時ごろ、妊娠8ヶ月だったジャンヌは、実家のアパートマンの窓から身を投げた。